

## 2 月第 3 週の礼拝説教

- 日 時：2026 年 2 月 15 日（日）10：30～11：30 降誕節第 8 主日
- 説 教：保科けい子牧師
- 聖 書：新約：マルコによる福音書 4 章 35～41 節（新約 P68～69）
- 説教題：「風は やみ」
- 讃美歌：60（どんなにちいさいことりでも）  
456（わが魂を 愛するイエスよ、）

先ほど歌いました讃美歌60番は、本日の週報の「讃美歌のミニ知識」欄で奏楽者の川谷さんが解説してくださっているように、作詞者は菅千代さんです。この方は、仙台北教会の牧師夫人でしたが、もう一つのお働きはキリスト教幼児教育に力を注がれたことです。先週は、そのことを考えながら本日の聖書箇所マルコによる福音書4章35節から41節を読んでおりました。そして、私がかつて仕えておりました仙台東一番丁教会の礼拝堂の天井を思い出していました。かなり高い天井は船底を表すアーチ型の太い梁になっていましたが、それはまた私たちがお祈りする時の指の組み方を表していると言われていました。この工事は、空中で太い木材をアーチ型にして組み合わせるといって非常に難しい技術と高額な費用を必要としたと聞きました。本日の聖書箇所マルコによる福音書4章37節には「激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。」と記されていますが、それは世の荒波をかぶる教会の象徴でもあります。主イエスはそのような中で、風を叱り、波をおさめることによって、世にある教会が信頼すべき方が誰であることを示しています。だからこそ、その主イエスに信頼してひたすら祈る姿を両手の指を組むという形で、礼拝堂の天井に位置させているのです。

さて、本日の聖書箇所マルコによる福音書4章35節から見てまいります。「その日」とは、湖畔にいる群衆に舟から教えを説いた日のことであると考えられています。夕方、主イエスと弟子たちは舟で向こう岸に漕ぎ出します。この舟は、4章1節以下でイエスが腰をおろして教えを説いた舟です。舟は湖を渡る交通手段であるだけでなく、この世を渡る教会を表す象徴でもあることを示しているということは、主イエスが「私たちは渡ろう」と弟子たちに呼びかけていることから言えるのです。福音書では「舟」はガリラヤ湖上に浮かぶ小さな漁船を表わしています。かつて、「舟」で網の手入れをしていたゼベタイの子ヤコブとヨハネは、主イエスに呼ばれると「舟」を残して、すなわち生活の手段を捨てて、主イエスに従いました。ガリラヤ地方を宣教しながら移動する主イエスや弟子にとって、舟は欠かせない移動手段ですが、単なる移動手段ではなく、湖畔の群衆に教える主イエスが腰を下ろす場所であり、弟子たちが主イエスの起こされる奇跡を体験する舞台でもあったのです。言い換えれば、群衆に教えを説く説教台の役割を果たす舟でしたから、この世に宣教し、世を渡って行く教会を表す象徴となっているのです。

そのように漕ぎ出した弟子たちの舟を突風が襲いました。先ほども読みました 37 節では「激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。」と記されています。この舟に同乗している中の 4 人は現役の漁師でした。そういう彼らがガリラヤ湖を渡ろうとして舟を出したわけです。おそらく、小さな時からガリラヤ湖を漁場にして漁師をしていたという人たちですから、ちょっとした気候の変化、例えば、今日は雲が出ているとか、今日はこういうところから風が吹いているのでこれは気候が変わるかもしれな



の一言で、嵐は止んだのです。主イエスは、何かの呪文を唱えたり、魔法や超能力によって嵐を鎮めたわけではありません。「風を叱り、湖に、『黙れ。静まれ』と言われた」のです。するとその御言葉に、風や湖さえも従ったのです。この出来事によって示されているのは、主イエスの語られる御言葉の権威です。主イエスが嵐を鎮めたこの出来事は、主イエスが、父なる神様から遣わされた神様の独り子として、天地の全てをお造りになった神様の権威と力を持っておられるということを明らかにしています。その主イエスがこの世に来られたことによって、神の国、神様のご支配は確かに始まっているのです。その主イエスが私たちの舟に乗り込んで下さっているのだから、神の国は、私たちの内に既に来ているわけですし、確実に前進しているのです。40節で、主イエスは「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」と語りかけておられます。風を叱り、湖をも従わせる主イエスの権威を目のあたりにし、主イエスからのこの語りかけを受けた弟子たちは、「非常に恐れた」とあります。そして「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言ったのです。彼らは嵐の恐怖とは違う、もっと深い恐れを抱かせられたのです。その恐れは「いったいこの方はどなたなのだろう」という問いと結びついています。私たちが主イエスの奇跡の出来事に出会うとき、また、主イエスからの御言葉に触れるとき、それは私たちに主イエスに対する本当の畏れを呼び起こすのではないのでしょうか。そのときにこそ、私たちの心の風はやみ、すっかり凧になるのではないかと思います。そのような凧になった状態で、私たちは今日もこの教会を出て、この世の中に遣わされていきたいと思えます。

お祈りをします。

主なる神様、ガリラヤ湖上で、主イエスと弟子たちが乗った舟がまさに沈みそうになるという出来事を、聖書の御言葉から一緒に聞きました。私たちも時には心が非常に乱れて、苦しみ、悲しみの中に我を忘れて大声で叫ぶしかない状況に陥ることもあります。そのような時に「黙れ、静まれ」という御言葉が主イエスの口からまず発せられて、私たちをいつも静めてくださることを深く信頼して歩んでいきたいと思えます。今日、様々な事情のためにこの礼拝に集い得ない方がいます。また、非常に厳しい闘病生活を送っておられる方もいます。どうぞあなたが一人ひとりに臨んでくださり、必要な御言葉を持って励ましてください。この祈りを主イエス・キリストの御名によって、おささげします。アーメン